
ほったらかしの世界

かさのきず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほったらかしの世界

【Nコード】

N7086H

【作者名】

かこのきず

【あらすじ】

私、幽霊なんだけど。最近どうもうざい奴がいるの。そいつは私のことを見えて、声を聞いて、触れる。なんかよくわからない奴なんだけど……。

この教室に、私に話しかけてくる人は誰もいない。
シカト……無視っていうわけでもなく、誰も私のことが見えないの
だから。

私は、幽霊だから。

そんな私だけど、最近ひとつの悩みを抱えている。それも、人間
関係の。

もう死んでしまつて、誰にも見えないのだからそんな悩みなど抱
えるはずはなかったのに……。

今、教室の端っこのほうで生徒たちを眺めている私を、ちらつと
見た人がいた。

そう、彼のことだ。名前は佐上 佑介。高校二年。部活はテニス
部。結構うまい。

どうやら、彼は私のことが見えるらしい。

それだけだったら、まだよかった。

彼は見えるだけでなく、私の声を聞き、その手で触れることもで
きる。というのだ。

「はあ」

おもわず、ため息をつく。

人間関係で悩みたくなかったから死んだのに、これじゃあ、意味
がなかったじゃないか。

でも、さすがに他の人と話をできないのは退屈になってきていて、
要するに彼と話してみたいと思つている。

また後悔するに決まつているのに……。そんな風に思つてしまつ
私に腹が立つてくる。

私は、ちょうど近くにあった彼の机の椅子を蹴飛ばす。

もちろん、幽霊である私の足は当たらず、すり抜けた。

……なんだか、さらにいらだつてきたような気がする。

「おい」

怒りのあまり唇をぎりぎり噛んでみると、彼がすぐそばに立っていた。

私のほうを向いて、携帯電話を耳に当てている。

うまくやったものだ。こうすれば何もないところに向かって話しかけているような変な人には見えなくなる。

「どうかしたのかよ」

「あんたのせいよ」

彼は困った顔をしていた。当たり前だ。八つ当たりなんだから、何の事だかわかるはずがない。

ざまあみる。そのまま困らせてやる。

「じゃあね。私、屋上で寝てるから」

「おいっ、ちよっと待っ！」

彼の声を無視して、私は天井をすり抜けて上へと昇っていく。こういうとき、幽霊って本当に便利だなあ、って思う。

学校の自縛霊だから、ここを出ていけないのを別にすれば。

すぐに屋上には着く。

授業をサボりに来ている生徒はいない。そんな奴が来てたら私がぶっ飛ばす。とはいえ、こんな体じゃ何もできないのだけど。

さあ、寝ようかな。

幽霊には睡眠は必要ないんだけど、眠ることはできる。

私はお昼寝が好きだからよく寝るのだけど、特にこの場所で寝るのが好きだった。

というか、ほかに眠る場所なんかはないのだけど。

教室は教師の声がうるさいし、空き教室はほこりっぽい。幽霊でも、ほこりが目の前をとんでいるのが見えていたらいやだ。

それに、この場所は気持ちいい。

いつものように、ちよっとだけ浮かんで大の字になって目をつぶ

る。

グラウンドから体育の授業を受けている生徒の音が聞こえてくる。さっき見たところ、今日はバスケットボールだったはず。

あ、笛の音。誰かがシュートを決めたのかな？ それとも、ファール？

気になるけど、目をあける気にはならない。この状態が心地よかった。

「おい、寝てるのかよ」

目を覚ますと、すぐ下に佐上がいた。

「つて、スカートの中見えるじゃん。」

「見ねえよ」

慌ててスカートをおさええると、彼が言った。

「それはそれで負けた気がする。」

「とりあえず、グーで脳天を叩いてやった。」

「なにすんだよ！」

「見えないとも限らないじゃない」

「適当な理由をつけると、納得したようないような微妙な表情で黙った。」

「つてか、なんでこんなとこにいるのよ」

「……………朝のことが気になったんだよ。授業もまともに頭に入らないからな。仕方なくだよ」

「いつもはなるべく私のことを避けているくせに、今日に限ってなぜだか私にかかわってくる。」

「ムカつく！」

「痛っ、なんで蹴るんだよ！」

「うるさい！ 黙って蹴られてる！」

「朝から何をそんなにいらついでなんだよ！」

「そんなこと、あんたに関係ないでしょっ！…」

ほんの少しだけ宙に浮かぶと、顔面めがけて回し蹴りを放つ。しかし、佐上はその手で私の足をつかんでしまった。

「関係あるんだろ。俺と出会ってからだ。お前がそんな風な顔をす
るようになったのは」

「くっ……うるさい！」

もう片方の足で佐上の顎を蹴る。

佐上はのけぞって倒れた。

「私にしゃべらないでよ。疲れたのよ、人の相手をするのは。私は
一人で生きるんだから！」

「いや、もう死んでるし……」

「うるさいっ！」

間違えたのよ！

「いや、お前が人間関係に弱いつてことはわかってるけどさ」

「……………」

「なんか、気になるんだよな。放っておけないというか……」
蹴っておいた。そんなに頼りないか！

「……っ。いちいち蹴るなよ！」

「いちいち文句言っな！」

「理不尽だ」

佐上がうなだれるのを見て、私は逃げる。

まったく、いちいちかまわないでほしかった。私の相手をするの
なんてつらいだけだろう。

「でもさ、楽しくなっちゃったんだよな。そんなお前と話すことも」

「はい？」

え、何それ。っと、あっ！

あまりの驚きにバランスを崩してしまい、地面。といっても、屋
上の床なんだけどそこにみじめに落ちてしまった。

「え、それ何？」

「あ、いやだから、友達になってもいいなって」

「なってもいい？」

「なつてほしい」

なんだ？ こいつ。幽霊と友達になつてほしい？

「ほら、隣に座れよ。なんか話そうぜ」

「まだ返事してないんだけど」

「授業サボったから暇なんだ」

「聞いてないし。まあ、いいよ」

佐上の隣に座る。肩に触れるその感触が妙に安心した。

「少しくらいなら付き合つてあげるよ」

(後書き)

「ほったらかしの島」のCMを見ていたら思い浮かびました。
ただ、内容はまったくのオリジナルなので、映画とは何の関係も
ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7086h/>

ほったらかしの世界

2010年10月8日15時56分発行